



映画の「砂の器」の撮影に使われた八川駅の駅舎。



木次線ストロール⑤ 八川駅 「映画のロケに使われた駅舎と 名物の手打ち蕎麦」

取材予定日の1月15日月曜日は、朝から小雨が降っていた。天気予報は曇り時々小雨で、気温もさして低くはなく、これぐらいなら大丈夫だろうと午前8時半過ぎに、庄原市内の自宅を車で出た。曜日が限られているので、一週間先延ばししても晴れてくれる保証はない。

国道183号線を備後落合駅の手前で左折して、国道314号線を登って行くと、沿道にちらほら雪が残っている。油木駅の前を通り過ぎる頃には、小雨がみぞれに変わってきた。

余談だが、油木町にある高原酒造のどぶろく「油木のしずく」を先日、購入した。庄原酒販が毎月開催している地酒の「利き酒・試飲イベント」で、「油木のしずく」も販売されている。どぶろくなので、米粒が残るどろりとした食感なのだが、思いのほかすっきりした喉越しで、米の甘味がじんわりと広がってくる。

みぞれは吹雪に変わって、三井野原高原トンネルの向こうは完全な雪景色だ。列車は運行しているのか不安になった。近年の木次線は降雪による運休が多く、「また冬休み？」と鉄道ファンから揶揄されている。おろちループを下るにつれて、

雪はまたみぞれにかわり、出雲坂根駅に着く頃には小雨になっていた。それだけ高度差があるのである。

10時6分発の木次行き列車がホームに入って来た時にはホッとした。木次線では、きすきいろ（山吹色）をベースに、それぞれ4色のラッピング列車が走っている。今回はたたら製鉄の灰色と山吹色のツートンカラー。

スイッチバックで、ホームに停車した列車の中を運転士が移動する。乗車は後ろのドアから。列車の前後が逆になるので、待機する場所を間違えてしまい、あわてて反対側の扉まで走った。列車は、進行方向を変えて動き出す。

先客は一人だけ、服装から観光客だろうか。奥出雲おろち号のラストランで熱狂した昨年11月の賑わいが遠い昔のようだ。15分ほどで、八川駅に到着した。駅の出雲神話にちなんだ愛称は「脚摩乳（あしなづち）、奇稲田姫（くしいなだひめ）の父神で大山津見神（おおやまつみのかみ）の子。つまり、脚摩乳は山の神の子供で、美しい山々を守ってくれているという寓意が込められている。

3頁の『砂の器』と木次線」

の新刊紹介でも書いたが、映画では八川駅の外観が亀嵩駅として撮影された。当時の写真をネットで確認したが、屋根が拭き替えられたぐらいで、駅舎はほとんど変わっていない。ただ、屋根の上には撮影用の「亀嵩驛」の看板が設置されていた。

ゴツゴツとした木の改札口や出札所の窓口はどっしりとしていて、歴史の重みを感じる。開業は昭和9年（1934年）なので、90年の歳月を経ているということか。黒光りする木のベンチに腰かけて、しばし昭和の空間に浸っていた。

雨が止んでいたので、駅の周辺を

散策した。平地に集落が広がっていて、314号線を横田方面に歩くと、農協関連の建物や公民館、幼稚園や小学校がある。その八川小学校の校庭の奥に絲原武太郎の像が立っている。高い台座の立像で、遠目でも威厳がある。

奥出雲町大谷雨川の絲原家は、たたら製鉄で財を築いた名家である。明治10年代には、島根県のたたら製鉄は、全国の鉄の生産量の半分を占めるほどの隆盛を誇っていた。しかし、海外から安価な洋鉄が輸入されるようになり、国内でも鉄鉱石を原料とする近代製鉄が本格化されると、

島根のたたら製鉄は次第に衰退。そこで、十三代の武太郎が活路を求めたのが、製鉄から製炭への転換だった。

製鉄の燃料用に作っていた木炭を製品化して全国で販売する、そのためには輸送網を整備する必要があるということだ。武太郎は木次線の敷設に尽力することになる。この辺り、『砂の器』と木次線に詳しく書かれている。

駅前に戻って、手打ち蕎麦で有名な「八川そば」（写真下）で少し早い昼食。山菜蕎麦を注文したのだが、普通のツユと蕎麦湯のツユを選べる



絲原家第十六代当主、絲原武太郎の立像。



ようになつていて、蕎麦湯のツユをお願いした。とろりとした汁を口に含むと、濃厚な蕎麦の風味が広がって、寒風で冷えた身体が芯から暖まるような気がした。麦飯入りのおむすびは、まるで切る前の巻きずしのように幅があり、満腹になった。店で教えてもらった八川八幡神社を訪ねて、参拝した。駅から歩いて5分ほど。一の鳥、二の鳥の鳥居

のある立派な神社である。鳥居の背後には阿吽の狛犬がそれぞれ一休。かなり古い。社殿の前には楼門があって、左右の楼閣には弓を持った随神が鎮座している。カラフルに彩色された木像は、倭建命（やまとたけるのみこと）だろうか。向かって右の像が開口、左の像は閉口。従う狛犬の木像も阿吽である。

それぞれの楼閣には「遥拝所」と墨書で書かれた木札が貼られていて、右の札には「出雲大社、熊野神社、美保神社、日野碕神社、佐太神社、須佐神社」の名称が記してある。左の札には「物部神社、水若酢神社」、残念ながら後の3つの名前が消えて判読できない。八川八幡神社に参拝すれば、木札に書かれた名だたる神社にも願いが届くということだろうか。

石段を登って、本殿に参拝。能登半島地震の被災者の方々の平穏を祈願した。今でも、「早く逃げてください！」というアナウンスの絶叫が鼓膜に残っている。わたしにとって、これが初詣だということに気づいた。

いつものように、車を停めている出雲坂根駅まで歩いて帰る。止んでいた雨がまた降り始めて、それが小さな霰（あられ）になり、やがて吹雪になった。能登にも雪が降っているのだろうか。いつもよりも道程は遠く、辛いものを感じられた。

新刊紹介 『砂の器』と木次線

村田英治

冒頭に、映画スターにサインをもらう純朴な少年が描かれている。著者の村田さんが小学三年生だったときの夏の思い出で、相手は丹羽哲郎である。映画は不朽の名作『砂の器』、数々の映画賞を受賞して、興行的にも大成功を収めた。原作は社会派ミステリーの大家、松本清張。監督は野村芳太郎、脚本は橋本忍と山田洋次が手がけ、丹羽哲郎、加藤剛、緒形拳、加藤嘉など、名優が多数出演している。

映画の重要な回想シーンで、木次線の「亀嵩(かめだけ)駅」が登場する。実際に駅前のロケが行われたのは八川駅で、サインをもらった村田少年の実家の最寄り駅である。映像的に

趣のある八川駅が選ばれたのだが、映画の中では実際の地名とは違う場所ので撮影されたシーンもかなりあるように、その場所の特定や理由、裏話が丹念に掘り起こされている。エキストラとして出演した地元の人達の証言も興味深い。

ロケに参加した緒形拳のエピソードに感銘した。祭りの日に商家の酒宴にぶらりと独りで参加、地元の老人と会話することで、出雲弁のしゃべり方を勉強していたという。「役者魂」という言葉がぴったりくる。

松本清張が小説を書く前に、亀嵩を訪れたことはないという。しかし、『砂の器』において「ズーズー弁」が謎を解く重要な鍵になり、その東北弁に似た言葉をしゃべる「亀嵩」が舞台に選ばれた必然を、清張の生い立ちや半生を検証することで明らかにしている。

映画だけではなく、自身の故郷を走る木次線の歴史や問題点も詳細にレポート。本誌の「芸備線ストロール」のときにも書いたが、鉄道は、とくに地域との密着が深いローカル線は、文化遺産なのだと思う。経済だけでは判断できない価値を有している。本書を読んで、ますますその想いを強くした。(発行はハーベスト出版)



東日本大震災復興祈願法要 ESTACION ライブ

日時：3月2日(土)

場所：萬福寺(庄原市是松町227)

TEL：0824-72-0292

※入場無料(会場に募金箱を設置しています)

- スケジュール -

13:00 チーズ「ふくふく牧場」

革職人「tears of clown」

アクセサリー「ハンドメイド☆Kei」

ガマ口「Sora 豆」

額縁「工房アム」

喫茶「萬福寺」(カフェ・マウンテン)

14:00 坐禅と法要

15:00 ESTACION ライブ



ESTACION (エスタシオン) プロフィール
yu-ko (ボーカル)、sangmi (カヤグム)、natsuko (アクセサリーデザイナー) の3人で韓国伝統楽器「カヤグム」を用いた異色の女性ユニット。昨年10月には結成10周年を迎えニューアルバム「めぐる季節」をリリース。憩いと安らぎの演奏をお届けします。

ハロー注意報②

——進駐軍がいた町のはなし

すず子とジョージ

松岡初枝



7月4日のアメリカ独立記念日には、地元民に対するサービスで基地を開放、航空機内も見学することができた。

米兵相手のおネエさん達の中には米兵の子を産んだ人もいた。近所のミエ子ちゃんなど髪が赤くて色白だったので、よく米兵に「G I ベビーさん？」と言われ「ノーノー、お父ちゃ

んは日本人！」と憤慨していたものだ。

G I ベビーの中にすず子がいた。私と同じ歳の黒人兵の子すず子は背が高く、目はパッチリ、髪はクルクルで、まるでテニス選手の大坂なおみさんのような子

だった。すず子母子を無視しながらも「黒ちゃんの子なんか産んじゃってさ…」という人も少なからずいた。

母子は我が家の美容室と一緒に来た。私の祖母や母は「はつえ、すずちゃんと遊んでなさい」と奥の部屋へ連れて来る。すず子はいつも私の髪に触れ「はつちゃんサラサラの髪の毛でいいな」と言う。私は何の術(てら)いも無く「すずちゃんだってパーマ要らないんだからいいな」、

子供どうしの会話は何気ないものだが、それもこの町の中でだったら何という事も無かったが、後に髪や肌の色もあって悲しい運命が待っているのだが、それはまだ先の事だった。足が速いすず子は駆けっこをして

も男の子を負かしてしまふ。「すずちゃんすごーい！」私はスラッと思ひたすず子の腕脚を、いつも羨ましいと思っていた。「私、アメリカの名前はベルって言うんだよ。日本語では鈴、パパが付けてくれたんだよ」「ふーん、ベルは鈴、だからすず子なんだ！」本当はすず子の母が付けたという。心に響くような子になってほしいとの母の願いだった。すず子の父と覚しき黒人兵は、彼女が生れてすぐに米国に帰り、そのまま音信不通となった。

昭和三十年の年が明け、私とすず子は六歳、小学校入学が近づく頃、すず子母子が店にやって来た。「先生、お世話になったけど、二人で田舎に帰ることにしたの。実家の近くの学校に行かせようと思ってサ」「そうかい：」祖母と母は暗い顔になった。北関東にある実家へ帰ればたぶんすず子は苛められる…。

「すずちゃん、この椅子に座りなさい」、すず子は嬉しそうに座った。い

つも母が座った椅子なので、急に大人びた顔になった。「今日はおバアちゃんとおばちゃん髪をサラサラにしてあげるよ」二人はコテを温めて髪を伸ばしていった。出来あがると、すず子は飛び上がった喜んだ。

「わー、まっすぐ！すず子の髪の毛サラサラになったー」。すず子の母は涙顔になった。「いいかいすずちゃん、今だけまっすぐなんだよ。洗ったら又クルクルになるんだよ。でもそれが本当のすずちゃんの髪の毛なんだよ。一生すずちゃんの頭を守ってくれる大切な髪の毛、わかったネ」祖母はきっぱりとそう言った。「うん」と笑うすず子。「はつえ、リボンあげなさい。すずちゃん、好きなを選んでね」。すず子は赤いタータンチェックのリボンを選び、ポニーテールに結った髪に付けた。鏡の中の嬉しそうなすず子。私の一番好きなりボンだったけどまあいいかと思った。サラサラの髪に赤いタータンチェックのリボンを付けたすず子との別れの日だった。

三、四年が過ぎた頃、すず子の母と同業だったTさんがひよっこり店に来た。「お久しぶりです」Tさんは暗い顔で話しはじめた。

すず子母子は実家で冷遇された。



ジョンソン空軍基地の司令官室で撮られた記念写真。
司令官を囲む地元の人たちは皆、スーツにネクタイの正装だ。

ジョージの母も他県からやって来た人で、彼を連れて実家へ帰ろうとしたが拒否された。それでも懸命に働いてジョージを育てた。だが次第に心を病み、彼が小学生の頃に自死した。孤児となった彼を心優しい清掃屋さんのOさんが引き取った。ジョージはOさんの仕事を手伝い、中学生の頃にはOさんの片腕のように頑張っていた。彼は野球部に入り、四番打者のスラッガー、「ジョー



ジ頑張れ！」と応援すると「オー！」と手を振ってくれる。ある日ジョージが「はっちゃん、オレのこと臭えって奴がいるんだよ」と悲しそうに言った。「お前は便所に行かねえのかよって言ってやりな」私は怒りと悲しみを込め、強い目で彼の顔を見つめた。「うん、そうするよ！」ジョージも強い目をしてそう言った。Oさんは同和地区の人で掃除屋をしていた。同和地区の人達は社会では嫌がられる仕事に甘んじるより他なかった。Oさんはジョージと自分の身の上を重ねていたと後に聞いた。ジョージが定時制の高校に入り、駅から近い校舎へ行くのと私が川越にある高校の授業が終り、電車で帰って来るのが同時刻で、時々すれ違う。「はっちゃん、お帰り」「ジョージ、勉強頑張れ」、姉と弟のような会話が楽しかった。

やがてジョージはOさんの娘と結婚した。女の子しかいないOさんにとって、心強い働き手であり、幼い頃から育てた息子同然のジョージと娘の結婚は願っても無いことだった。その頃はもう清掃屋から清掃会社となっていて、ジョージは社長になった。「親父さんには頭が上がらないよ」、ジョージの大きな体と優しさは人々から信頼され、市の公共施設の管理清掃を任されるまでになった。飲食店を始めたたり、ボランティアにも力を注いでいた。ジョージの息子は野球の強い高校に入り、父親譲りの立派な体、四番打者のスラッガーとなった。埼玉県代表で甲子園にも出場した。「はっちゃん、甲子園に行くてくるよ」嬉しそうなジョージ、「私もテレビで応援するよ」。その年の高校野球全国大会がひととき身近に感じられた。七十歳を目前にした年、ジョージは急死した。妻がちよつと外出した時に独りで死んでいた。心筋梗塞だったと聞いた。七十年を力一杯走り抜けた波瀾の人生だった。ジョージは死んだ母親に会えたかどうか。見も知らない米兵だった父親に会えただろうか。今は天国にいるジョージに訊いてみたい。

近所でも学校でも二人への目は厳しかった。追われるように家を出て、横田基地のある町へ行ったが、そこにも長く居られずに横浜へ。やっと職をみつけた母だったが、無理が祟って急死。残された子孫を米人牧師が養女にしてアメリカへ連れて帰った。Tさんは話し終えると、肩を落とすようにして帰っていった。

とがせめてもの救いだったと思う。まず子と別れて七十年近く、もう一度会ってみたいと心から思う。今はアメリカのどこかで立派なおバアちゃんになり、子や孫と平穏な生活を送っているだろうか。互いの来し方は異なっても、一緒に遊んだあのすず子に会いたい。ジョージは白人兵の子で私より一歳下のハンサムで長身、スポーツ万能な元氣者だった。彼も又、私が知る由もない程の苦渋の半生を過ごした一人だった。

ジョージの母も他県からやって来た人で、彼を連れて実家へ帰ろうとしたが拒否された。それでも懸命に働いてジョージを育てた。だが次第に心を病み、彼が小学生の頃に自死した。孤児となった彼を心優しい清掃屋さんのOさんが引き取った。ジョージはOさんの仕事を手伝い、中学生の頃にはOさんの片腕のように頑張っていた。彼は野球部に入り、四番打者のスラッガー、「ジョー

顔を見た瞬間、「あれ？」と思わず声を上げてしまった。トレンチコートを着込んだ人物は、プロ棋士の吉川将大九段、日本将棋連合の花形棋士である。人工知能のAIが将棋で人間を凌駕する時代になって、パソコンを使って研究する若手棋士が台頭。その中で、五十代で孤軍奮闘、トップリーグのA級順位戦で活躍する吉川は、中年の星と呼ばれている。

「ああ、達人戦の対局で、三次に来てるんですね」

タイトル戦の「達人戦」の第1局が、異能の天才棋士と称された「実力制第四代名人」升田幸三の生誕の地である三次で開催される。若千二十歳のタイトルホルダーに、中年の星が挑むのだ。

「前夜祭を途中で抜けてきました」

そう言って吉川は、古本の棚が並んでいる店内を見渡した。ちなみに面識はない。将棋ファンであるわたしが知っているだけで、わざわざ隣の小さな古本屋を訪問してくれた理由がわからない。壁に掛けてある振り子時計が六回、鳴った。

「黒田……、黒田元（はじめ）の名前を憶えますか？」

わたしは頷いて、レジ横の自分用

の棚から一冊の本を取り出した。タイトルはシンプルに「黒田元詰将棋集」、トリッキーで妙手・鬼手を多用した作品は、読み上りもすつきりしていて美しい。黒田元はこの一冊だけで、詰将棋作家としてマニアックな将棋ファンの間で伝説となった。

もう五年になるだろうか。黒田本人がこの店に現れたのだ。本の買取の依頼だった。その中にこの本も入っ

この店のことが書いてありましてね」吉川がジャケットの内ポケットから、一枚の葉書を取り出した。「実は、黒田に出した今年の年賀状が、宛先不明で返ってきたんです。毎年元旦にきていた黒田の年賀状も、今年が届きませんでした」

ごかくぼし

あきふゆひこ
亜木冬彦

※県北の歴史や風物を題材としたフィクションです。

現代御伽草子 ⑧9

ていたのだが、身分証明書として免許証のコピーを取らせてもらったとき名前的一致に気づいた。ご本人ですか、と尋ねると、はにかんだ顔で頷いた。自分の蔵書にして、ときどき開いては頭の中で駒を動かしている。ときには一問解くの、一月以上かかることもある。

「黒田とはもう何年も年賀状の付き合

押されている。店の仕入元帳を確認して、免許証のコピーと照らし合わせてみたが、住所は一致している。「東京を離れてからは、電話番号も知らないんです。いつも年賀状を見て、元気でいるなど安心していただけです……」

自分にもそういう友人が何人かいる。年に一度の年賀状だけつながっている関係だが、そのか細い糸がプ

ツンと切れてしまうと、寂しさと不安を覚えてしまう。「ここに行ってみましょうか？」年賀状の宛先を指先でトントンと叩いた。「黒田は強かったですよ。初めのうちは、わたしと五分でした」閉店の六時半を待って、軽ワゴン車に乗り込んだ。二人は、奨励会の同期だという。奨励会とはプロ棋士の養成機関で、最初は6級からスタートして、成績上位者がどんどん昇級して、最終的には三段リーグで上位に入った者だけが、四段プロ棋士としてデビューできる。「序盤はいいかげんで下手くそなんです。終盤がめっぽう強くてね。のらりくらりと粘られているうちに、いつの間にか逆転されてしまう。詰み筋を見つめる能力が抜群でした」

頷いた。それが詰将棋に生かされている。

「でも、それが仇になって、次第に勝てなくなりました。階級が上って行く、みんな終盤が強いです。黒田も研究会に参加して、懸命に序盤の勉強をしたんですが、どうしてもぬるい手が出てしまう。プロはその一



手が命取りになる」

2月に入っていたが、路傍に雪が残っている。

「プロ棋士になるチャンスはあったんです。この一番に勝てば、三段リーグの2位以上が確定する。相手が二十五歳の人で、上位を争っていた。当時は年齢制限があつて、満二十六歳までに四段になれなければ、奨励会を退会しなければならぬ。その将棋は、黒田が序盤で優勢になりながら、逆転負けした。わざと負けたのではないでしょうが、十九歳の自分には今後もチャ

ンスがあるという甘さがあつたんだと思います。結局、最終戦にも負け、四段になれなかった。その二十五歳の人も次点で、プロにはなれませんでした」

宛名の住所に到着したが、嘩然とした。玄関の表札には「山田」と刻まれている。

「黒田さんからこの家を買ったんですよ。長らくお母さんの介護を自宅でお母さんが亡くなって、家を処分されたんです」

七十年配の男性が話してくれた。彼は、どこに行つたんですかね」

吉川の問いかけに、山田さんはかぶりを振った。

「自分でもわからないと言つてました。お母さんの他に家族はいないようでしたからね。放浪の旅に出ますと、冗談めかして話してましたが、案外本気だったのかな」

何かわかつたら連絡してくださいと、吉川が名刺を渡して山田さんの前を辞した。

「煙詰（けむりづめ）か……」

車に戻る途中で、吉川がぼそりと言った。煙詰とは、盤上の駒が次々と消えて、最期は必要最低限の駒（敵方の王将と自陣の駒2枚）が残る詰

将棋のことをいう。黒田自身が消えてしまった……。

「ここは星がきれいですね」

高台の場所にあつて、空が開けている。

「見つかるかもしれないな」

吉川が夜空を見上げた。

「あつた！ あそこの五つの星がある星座です」

吉川が指差した星座がぎよしゃ座であることを、小学生のときに天体観測に熱中していたわたしは知っている。ギリシア神話では、足が自由であつたため四輪馬車を発明したアテネ王エリクトニウスの姿とされている。馬車を操る馭者の姿。五つの星を線で結ぶと巨大な五角形になるので、ごかくぼしという呼び名もある。

「山梨の清里で研究会の合宿をしたときに、黒田が教えてくれたんです。将棋の星座があるってね」

なるほど、ぎよしゃ座の五角形は将棋の駒に似ている。

「明日は勝ちますよ。きっと黒田もどこかで応援してくれている。会いに来てくれるかもしれない……」

五つの星の中で、一際明るく輝いている星がある。1等星のカペラである。

まちの古本屋さん どろ書房

古書探索の旅に、お気軽にお立ち寄りください。

- ・ 無料本、百円本、50円本などのコーナー。無料の漫画ルームもあります。
- ・ 地元のポストカード、新鮮野菜の店頭無人販売もやっています。

※九日市の開催日は2月休業中でも開店します。

- 庄原市中本町 2-1-10
- 定休日：毎週月・火曜日（2月は店内整理で全休）
- TEL：090(9913)3052
- 営業時間 9:30～18:30

※広島銀行庄原支店の手前（三次側から）※交差点角のまちなか駐車場が使用できます。

「旧暦」のカレンダーを見る

古川 行洋

第二部 歴史事項を見る

七月十一日 保元の乱 保元元（一一五六）年

鳥羽法皇は皇位継承に無理したことは熟知していた。病が重くなると没後の争乱を予想して手を打った。法皇は源為義・平清盛など主だった武士十人ばかりを集め誓文を書かせ、



後白河天皇に忠節を尽すよう遺言した。

そして、崩御三日後の七月五日には京中の武士の行動を規制させ、八日には藤原忠実・頼長父子が荘園から軍兵を召集するのを阻止され、明らかに頼長に謀反の嫌疑がかけられたことになり、頼長らは窮地に追い詰められた。十日、崇徳上皇は源為義以下の軍兵集め、これに左大臣頼長も宇治から駆けつけ加わった。これに対し後白河天皇方は先制攻撃をかけることとし、十一日未明、平清盛・源義朝らを差し向けて焼き討ちし、上皇方を壊滅させた。

七月十八日 室町幕府滅亡 天正元（一五七三）年

室町時代は、建武三（一一三三）年の建武式目の制定または暦応元（一一三三）年の足利尊氏の征夷大將軍就任から、天正元（一五七三）年足利義昭が織田信長に京都を追われまでの約二四〇年間をさす。

最期の十五代將軍足利義昭は、織

田信長を利用して將軍となった。しかし、中央政權を信長に左右され、無力化してゆくことに不満と怒りを抱き、越前の朝倉義景と内通し、信長追討を策した。策略に成功した義昭は、朝倉・浅井両氏、石山本願寺門徒、比叡山の僧徒、伊勢の長島一揆、甲斐の武田信玄などに御内書を密送して、信長に対し一大包囲作戦を展開させた。天正元（一五七三）年四月、

信玄は三河の野田陣中で死去、義昭はその死を知らず挙兵する。信長は、二月十六日石山の砦を攻め、二十九日義昭は敗れ京都に逃げ帰る。三月二十五日義昭は朝廷を通じて和議勧告を信長に降ろし和睦した。信長は、五月二十二日義昭の再挙兵に備え、十数艘の兵船を急造させた。七月四日義昭は挙兵し宇治の槇島の支城に籠った。十六日に信長は槇島城を攻めて義昭を河内に追放した。室町幕府の滅亡である。

七月十九日 蛤御門（はまぐりごもん）の変 元治元（一八六四）年

薩摩藩と会津藩は中川宮と組んで文久三（一八六三）年宮廷クーデターを敢行し、三条実美ら長州系の尊攘激派を追放した。朝廷は長州の嘆願を無視続け、入京は断固として拒否した。長州は実力で入京するしか

いと、南と西の二方面から、嵯峨方面からの軍が蛤御門を攻め、この戦闘が最も激烈だったので、この戦を蛤御門の変という。戦は一日で終わった。この戦で、尊皇攘夷派の代表、久坂玄端ほかの死で尊王攘夷派の時代は完全に去った。（画像は「蛤御門の合戦図屏風」の一部）

七月二十五日 平家都落ち 寿永二（一一八三）年

北陸方面における源義仲の勢いが強くなったので、平氏は維盛（これもり）・通盛（みちもり）を大將にして十万の軍勢を追討軍として派遣した。五月十一日に加賀・越中の国境、砥浪山付近で義仲軍と対陣した。義仲は平氏の大軍を狭い俱利伽羅（くりから）峠にさそいこみ平氏を追いやった。義仲軍は七月には近江国に到り、比叡山より京を臨んだ。

平家は京都に留まる事に不安を感じていた。後白河法皇は平家の都落ちの気配を知って、ひそかに比叡山に身を隠された。法皇を同行することとはあきらめ、安徳天皇、建礼門院を奉じ、神璽（しんじ）、宝剣以下を具して、二十五日ついに都を捨てて西へ向かった。都を去るにあたり、六波羅、池殿、八条殿など一門の邸宅をはじめ、家々に火を放った。

「退任後も観光振興に協力 ザンビアの観光大使に就任」

山崎 允まこと

南アフリカ航空287便の翼端に、オレンジ色の朝陽が映え輝いている。香港から13時間の長旅を終えヨハネスブルグ・オーアルタンボ空港に着陸するためファイナル・アプローチに入った。わずか10日前に、パソコンに見慣れぬ差し出し人からのメールが入っていた。

「貴殿を我が国の観光大使に任命する式典を催したいが出席は可能であるか？ 勿論、往復航空券、ホテル、食事付きで……」。「な、なんだったー！」、私は目を疑った。我に返って、何度も何度も読み返した。差し出し人はザンビア共和国観光大臣 キヤサリン・ナムガラ氏とあるが、ザンビアをあとにしてから7年も過ぎていたのに、私のことを覚えてくれていたのだ！

非常勤講師として観光業の教鞭をとっていた大学、短期大学、観光専門学校へ休講日と補講日の申請をすませた。東京ザンビア大使館にも報告した。出発2日前に、メールの添

付ファイルのイー・チケットを、我が家のプリンターで印刷した。

初めて目にする代物で、このA4サイズの紙で本当に飛行機に乗ることが出来るのか心配になり、出発前に大阪の全日空（オリジナル・キャリア）の営業所に足を運んだ。なんと、全日空の営業所はなくなっていた。日本で2番目の都市から営業所を引き揚げたなんて、自分が現役だった



時のころから大きく様変わりしていることに驚いた。しかし、電話で問い合わせすると、実にときばきと答えてくれて、こちらの不安は払拭された。大きなビルの中に事務所をもたなくても大丈夫で、経費の節減に役立つと逆に感心した。

母が作ってくれていたタキシードに袖を通してみた。「いける！ バツチリ」。週6日4キロのランニングと500メートルの水泳の成果だよと自分を褒めた。念のため、お礼のスピーチを準備して、友人の英国人教師に原稿を添削してもらって、練習しておいた。

香港からの13時間のフライトは横2席を与えてもらったので、横になることが出来て最高の睡眠がとれた。ヨハネスブルグ空港では、3時間の乗り継ぎの間に、シャワーを浴び、マッサージをしてもらい、ザンビア共和国首都ルサカまでの2時間に備えた。

ザンビア共和国首都ルサカにある国際会議場に於いて、20時からザンビア国歌の斉唱に始まりセレモニーが始まった。最初に、観光促進の新しいロゴのお披露目パーティーが約1時間、そして海外で観光促進に貢献しているザンビア人4人、そして

私の紹介があり、メダル、証書、バッジの授与式、記念撮影。それから会場をあげて国民が得意とする尻振りダンスのダンスが明け方3時ごろまで続いた。

私の紹介では、JICAシニアボランティアとしてザンビアの観光地の調査、「クオンボカ祭り」等のツアーを造成し観光客を誘致。日本に帰国後、愛知万博会場のザンビア館で約半年間にわたり来場者にザンビアを紹介&PR。その後東京大使館の観光担当書記官を携え東京、名古屋、大阪の大手旅行業者を営業訪問し、ザンビアへの観光客送客を促していることを説明していただいた。JICAの任期わずか2年間で、ザンビアの観光業に目に見えた成果が出せるとは思っていなかった。退任してからは、大使館の観光担当者が日本の旅行会社をくまなく営業セールスするように指導した。現地の生の情報提供が喜ばれて、様々な旅行企画につながった。そうした地道なボランティア活動が認められたのだ。

観光大臣のナムガラ氏から、メダル、証書、バッジが授与された(写真)。ザンビアの観光大使として、これからも自分にできることをしていこうと心に誓った。

(最終回)

どろくろ俳壇&歌壇

※参加を歓迎します。

早春の巣箱に棲めるもの見えぬ

近藤 昌平

姿見ぬ日の寂しさや寒すずめ

富久光

温かき言葉添えある賀状かな

片岡 正人

同じ日を繰り返しまだ春浅し

隆愚

冬至湯や一番風呂の仕舞風呂

大槇 三代子

さりげなく色あわせたる冬帽子

寺内 龍二

列島が忌中となりし松の内

赤川 冬人

震災の地にも日はまた昇る

元旦の宵に襲ひし大地震

松岡 初枝

雨雪降るな彼の地の上に

投稿&寄稿

候のことば

「土筆」

隆愚

土筆はその形状から当てられた字であるが、見た目も愛らしく春の摘み草で喜ばれる。

「つくし」「つくづくし」は、地表に

煮て下さい」という歳時記には入れようもない俳句がある。

卵とじは、胞子の散る前の土筆がいい。節々の袴を丁寧にとって、少量のだし汁で土筆に火を通し溶いた卵で閉じる。僅かな量でいい。春の息吹を味わってほしいものです。

まま事の飯もおさいも土筆かな

星野立子(たつこ)

「フィルムカメラ」赤川仁洋

つげ義春の漫画に「カメラを売る」という作品がある。漫画業に行き詰った主人公が、古いカメラを修理して売るのが、クラシックカメラブームもあって商売は繁昌、しかし仕入れ先の先細りでこの商売も行き詰まる。

このカメラ販売、近所の古物商で壊れたカメラを買ったのがきっかけ。ガラクタの山の中で暮らしている店主の姿を自分に置き換えてみて、「ゴミの中に埋もれこそごしているのは自分の性に合っている」と主人公は述懐する。この辺り、古本の山に埋もれて晩年を過ごしている自分と重なって共感できる。

さて、カメラだが、一時期、わたしも収集に熱中した時期がある。デ



ジタルに切り替わって、古いフィルムカメラがヤフー・オークションで大量に放出された。千円、二千円の捨て値でいくらでも買うことができた。目的は売買ではなく、そのカメラに白黒フィルムを入れて撮影すること。時代を経たレンズは、鮮明ではないだろうが、個性的な陰影を遺してくれるのではないか。

さて、そろそろ撮影してみるかと思っ問題発生。白黒フィルムの製造が細って、36枚撮りのものが二千円もする。さらに現像&紙焼きに出すと……。店の二階のガラスケースに収納したカメラは20台以上。古本屋のおやじに、贅沢な趣味は似合わないのである。

第269回

くんちいち

しょうばら九日市

出店予定一覧（順不同）

- ・文屋
- ・郷屋
- ・ぬくもり
- ・ちくちくはうす玉手箱
- ・お福
- ・工房アム
- ・農楽会
- ・二八そば加工所
- ・とらぢ
- ・健康企画グループ
- ・里山キッチンほっぺ
- ・久代水産
- ・くんえん工房 香豚
- ・克国水産
- ・田崎屋
- ・宮川屋
- ・和み屋
- ・どんぐりーず
- ・てしごと比和
- ・アーミッシュ
- ・満じいの手打ち蕎麦
- ・17KICHEN
- ・かぐや姫
- ・ふくふく牧場



2月9日(金)

9:00~13:00



TOPICS

- ★市民ギャラリー「アート多愛夢」
2月8日(木)~10日(土) 10時~15時
楽しいひなまつり展
- ★特別支援学校・木工&加工食品販売(楽笑座)
- ★庄原小学校 3年生研究発表(横山宅)
- ★HONMACH STAND→コーヒー100円引き
- ★カフェクラウド→タピオカドリンク100円引き
九日市特製ピタサンド600円
- ★どら書房、休憩室(漫画ルーム)あります!

*出店申込みは、【毎月20日締切】 コンパネ1枚スペース1,200円~
九日市愛好会事務局 TEL/FAX(0824)72-8285
〒727-0013 庄原市西本町2-1-10 (楽笑座内)

【ホームページ】
<http://www.kunchi-ichi.jp>

